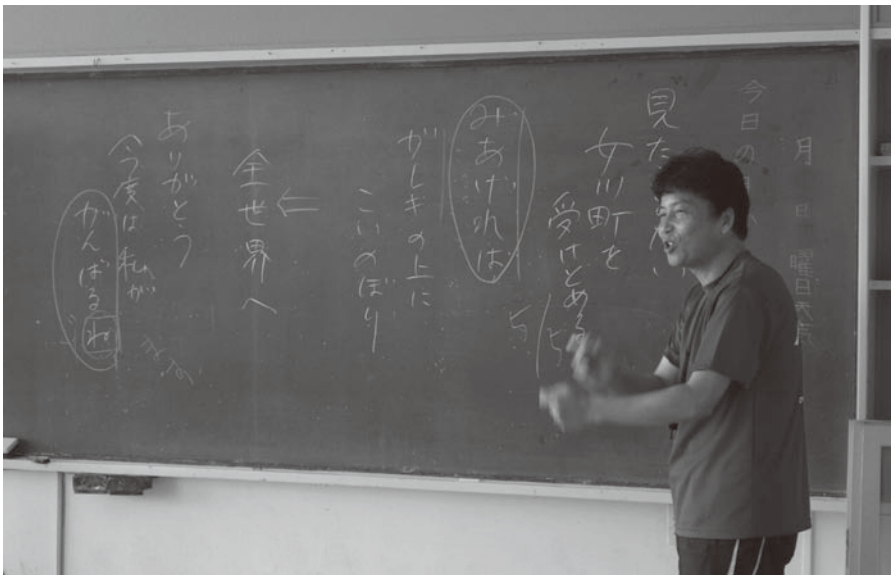
胸うたれた不屈の精神
「まげねっちゃ」
～ボランティアの現場から～

藤澤花帆（法学部1年）



奮闘する女川中の佐藤先生（撮影者＝松本真理子氏・中大ボランティアステーション）

「これ、ほとんど俺が撮った写真だよ」

宮城県女川町で震災をもとに発行された写真集『まげねっちゃ』（2012年・青志社）を手にうれしそうに話すのは、女川中学校で国語を指導している佐藤敏郎教諭だ。

佐藤先生は震災以降、学校の防災担当教諭として学校防災に関する様々な活動に従事している。この活動が大変なのだ。

中央大学ボランティアステーション主催による「学校支援ボランティア@女川」に参加して、8月中旬、ほかのメンバーとともに女川に入った。被災地で初めて、震災当時の状況や体験したことを伺う機会があった。スピーカーは佐藤先生だった。

「はじめは食料の配給が不足して、肥満気味だった同僚の先生のウエストが一回りも細くなって、驚いたよ」

当時の苦労を冗談交じりに話す。しかし、時折見せるどこかせつなそうな表情に、私は何となく違和感を覚えた。

「あのころは大変だったなぁ」

そうつぶやく佐藤先生の顔に普段の陽気な笑顔はなかった。

記事で知った衝撃事実

5日間の活動を終えて、大学に戻ったあと、女川についての記事を渡された。記事で、佐藤先生が震災で小学生の愛娘を亡くされた事実を知った。私は言葉を失った。

あのときの何とも言えない複雑な

災害はさりげない日常を襲う
大災害はさりげない日常を奪う

女川中　佐藤敏郎教諭

表情の意味を察した。

そして、「災害はさりげない日常を襲う、大災害はさりげない日常を奪う」という佐藤先生の言葉は、自身の経験をもって紡いだ言葉だったのだ、と理解した。

震災から2年半以上が経過した今もなお、当時のつらく悲しい経験を抱えて生きている人がたくさんいる。震災後何年経とうと、佐藤先生のように、つらいことを乗り越えようと自分の気持ちと向き合い、震災前よりも素晴らしい町になるよう奮闘する人たちの存在を忘れてはならない。

良きサポーターとして

今回のボランティアを通して感じたことがある。被災者とそれ以外の人たちとの間に、心の壁を作ってはいけない。

私は岩手県盛岡市の出身だが、盛岡は被災地といっても内陸に位置しているため、津波による甚大な被害を経験した訳ではない。

今回初めて、直接的な津波の被害を受けた地域を訪れることに、言いようのない不安な思いがあった。しかし、女川を愛する多くの人々が、それぞれの立場から復興に熱意を持って取り組む姿に、地元を思う気持ちは全国どこでも変わらない、同じ東北人として、私なりにできることがあるはずだと思うようになった。

避難所としての学校

大災害が起こった際、多くの住民は学校をはじめとする指定された避難所に避難することになる。情報収集や物資の確保など避難所の運営は当然、教師などの現場の職員によって始められる。

しかし、生徒の安否確認や学校再開に向けた業務を行わなければならない教師たちにとって、避難所の運営は肉体的にも大きな負担となる。

前述した佐藤教諭のように、自らの家族の安否が分からないまま、数日間学校に残り続けることは精神的にも相当な苦労を強いられることになるだろう。

今回の震災でも、避難所としての学校の在り方が問題として挙げられた。注目されたのが、平成20年度から文科省が主体となって実施してきた「学校支援地域本部」である。

これは、地域住民がボランティアとして様々な学校支援活動を行うことを事業としており、宮城県の「みやぎの協働教育」などが実例に挙げられる。

文科省の調査によると、宮城県内の中学校40校に避難所での自治組織の立ち上がりについて質問したところ、学校支援地域本部を設置する20校の95%が順調だと答えた。一方で、未設置の20校で順調だったと答えたのは、35%に留まった。

災害時の避難所運営は、現場の職員の力だけでは決して十分とは言えない。緊急時に迅速な対応をとれるよう、日ごろから学校が地域住民にとって身近に開かれた存在であることが、今後の防災にとって重要であると考えられる。ボランティア活動で勉強することはたくさんある。

私はボランティア活動にこれからも継続して携わりたいと思っている。現地の人たちの良き理解者、良きサポーターとして気持ちを分かち合っていきたい。それが本当のボランティア精神につながると信じている。

「ウィー ラブ 女川」町に照らし出されたメッセージ（撮影者＝藤澤花帆）